

ログライン…殺しを請け負い生活してきた孤
児のハチが、護と出会い、請け負わなくても
良い人生に向かうお話。

タイトル…

僕の命はお前を守る

作…えん

登場人物

ハチ (19) 殺し屋

北原護 (10) 博士の家にいた男の子

双葉 (21) 殺しの仲介人

ヤブ医者(40)ハチの親代わりの医者

その他

子供時代のハチ (10)

子供時代の双葉 (12)

大人の護 (35)

悪党たち

施設の子供たち

○ランニングコース 早朝

走りながら双葉(21)が北原要博士の
写真を並走している若い男に渡す。

双葉「次はコレ」

写真を受けとる手。裏には住所と名前。

○北原の屋敷・塀の内側 深夜

塀の上から軽やかに飛び降りる黒装束
の男、ハチ(19)。辺りを見回す。

○同・研究室 深夜

低い作業台にピペッター・サンプルチ
ューブ・分析機器が並ぶ。どれも古く、
ドラフターは閉まりきっていない。

静寂の中、拳銃を手にドラフターを覗
き込むハチ。隣室で小さな物音。

○同・研究室の隣室 深夜

ハチがドアの隙間から身をすべらせて
入り、素早く銃口を向ける。

銃口の先にいたのは男児、北原護(10)。

○ランニングコース 早朝

並走する双葉とハチ。

ハチ「教えるよ、金だしや何でも引き受ける
元締めって一体誰なんだよ」

双葉「言えないっていつてんじゃん、しつこ
いな。つうか、知るのはあんたが死ぬ時だ
よ。で、その子誰だったの？」

ハチ「さあ」

双葉「おかしいわね、博士の発するSOSが
屋敷から出てたのに……」

ハチ「情報がいい加減だと、こちらら命とり
だからな」

双葉「そうはいつでもどうせやるしかないじ
ゃん。親もない根無し草なんだし」

双葉がスマホを受け、立ち止まる。

双葉「……博士、もうやられてたらしい」

○ハチのアパート

大学受験用の参考書が並ぶ本棚の片隅に黒服の子供集団が笑う小さな写真。熱っぽい額を少し押さえ、首をかしげながらスマホでニュースを見るハチ。

ニュース「北原要博士、殺害される(画像)」

毛布にくるまって眠っていた護が目を覚ましてハチを見る。横にはリュック。

護「お前、誰？ 父さんどこ？」

慌ててスマホの画面を消すハチ。

ハチ「俺はハチ。お父さんのことは知らない。

さ、これ食ったら警察に連れて行ってやるからそこで聞け。俺のことは言うなよ」

牛乳パックと菓子パンを放って渡すと、

ガツガツと食べ始める護。

護「警察には行かない……」

ハチ「じゃ、どこ行くんだ。俺は見ての通り、

ただの浪人生だ。お前を、養えな、い……

(急に目が霞んで倒れこむ)

× × ×

意識がうつろなハチの口に、護が小さなペットボトルから液体を流し込む。

× × ×

目をあけるハチ。高熱と発疹で真っ赤。

壁際に倒れている護の姿が見える。

力を振り絞ってスマホを取る。

ハチ「ヤブ、悪い、来てくれないか。ガキが、

倒れてる……(気が遠くなる)」

× × ×

ハチ「イッテッ」

ヤブ医者(40)が乱暴に注射針を刺す。

ハチ「なにしやがる」

ヤブ医者「それだけ元気がありやあ、大丈夫だな」

壁際でぐったり寝ている護。

ヤブ医者「たちの悪い風邪だろう、だいぶ熱

上がってたみたいだぞ」

ハチ「ガキは？」

ヤブ医者「腹減って死んでる」

ハチ「は？」

注射を抜いて、帰り支度する医者。

ヤブ医者「お前も栄養が必要だ。これで何か
食べ（千円札を数枚おく）」

○ラーメン屋『大地』

すごい勢いで大盛ラーメンをがつつい
ているハチと護。

ハチ「ラーメン汁を飲み干して）俺が倒れて
たら、誰か呼びにいけよ、クソガキ」

護「……（無言で食べ続ける）」

ハチ「なんにもできねえのかよ、屋敷のお坊
ちゃんは」

護「……。お坊ちゃんじゃないマモルだ」

ラーメン鉢を置き、護を無視して雑誌
のクロスワードパズルを始めるハチ。

なかなかできなくて放り出す。

汁を飲み終わった護がチラッと見て、
横からスラスラ答えを書く。

ハチ「え……」

○ランニングコース 早朝（あくる日）

ストレッチしているハチと双葉。

双葉「きっと博士の隠し子ね」

ハチ「いたのか」

双葉「戸籍にはないけど」

ハチ「戸籍なしか、俺らみたいだな」

双葉「とにかく面倒だから、早く捨てなよ」

ハチ「ああ」

○ハチのアパート

問答するハチと護。

ハチ「警察か、養護施設、どっちする」

護「養護施設ってなんだ」

ハチ「お前、なんにも知らないんだな」

護「……」

ハチ「養護施設ってのはよ、（回想する）」

○（回想）ハチのいた養護施設

野外で殺人マシンとなるべく、子供た
ちがサバイバルゲームをしている。

× × ×

射撃場でゼッケン『88』をつけ、射撃の練習をしているハチ(10)。

× × ×

武道館で年長者を相手に実践しながら格闘の練習をするゼッケン『28』の双葉(12)、傷だらけ。

× × ×

突然、黒づくめの男たちが施設に乗り込んできて双葉を捕まえる。瞬時に男に銃を向けるハチ。

ハチ「僕らの命は僕らで守る！(銃声)」

○(回想終わり)元のハチのアパート

ハチ「養護施設ってのはよ、普通は親のいない子を学校に行かせて、メシ食わせてくれるありがたいとこだ」

護「ふつうは？(本棚片隅の写真を見る)」

ハチ「お前、学校は？」

護「……」

黙ってゲーム機でゲームを始める護。

ハチ「だから、どうすんだよ」

○道

並んで歩くハチと護。

ハチ「わがまま言うなよ、お前が養護施設って言ったんだからな」

横を通る子供たちが乗る自転車をめずらしそうに見る護。

急に怪しい男たちが追ってきて護をかっさらおうとする。体当たりして防ぐ

ハチ。護の手を引いて走る、走る。

ハチ「どうなってんだ」

○ハチのアパート (日替わり)

勉強しているハチ、横で眺めている護。

ハチ「あっち行ってろ」

床に転がっている拳銃を手にする護。

ハチ「こら、触るなガキンチョ」

護を眺めてから、押し入れの奥から古い小さな拳銃を出してくるハチ。

ハチ「これ、やるよ。お前、なんか追われてるみたいだし」

その拳銃を不思議そうに触る護。

護に銃を握らせ、後ろから自分の手を

添えるハチ。

ハチ「いいか、しっかり持って、そう。左の親指をフレームにあてる。セイフティを外して、そう、相手をよく見て、自分の目と銃身と相手を一直線にして、引き金を引く」

何度も言われたことを反復練習する護。

ハチ「ま、打つことないけどな」

護「……。お礼に、勉強教えるよ」

ハチ「は？ 寝言は寝て言え」

護「僕、今25才。北原要のクローンなんだ。

欠陥があつて成長ホルモンが出ない」

ハチ「え」

護「大学、どこ受けるの？」

ハチ「あ、ああ、ヤブのあと継ぐんだ」

護「あのへんな医者？」

ハチ「俺にとってはオヤジ代わりだ」

護「医者になりたいのか？」

ハチ「ああ、だから金がある、私立はべらぼうに高い」

大学一覧の雑誌を持って来てめくる護。

護「ここは？ (防衛医科大学を指さす)」

ハチ「なんだ、これ」

護「金はいらないし、給料もらえる」

ハチ「マジ？」

護「自分の将来は自分の力で掴め、人に頼るとえらい目にあうぞ」

ハチ「ガキがえらそうに」

護「だからガキじゃねえ」

× × ×

ハチの勉強をみる護の姿。

× × ×

あくる朝。

毛布にくるまって眠っている護。

外から声がする。

ハチ(声)「おい、起きろ！ クローン」

目をこすり、起き上がる護。

護「名前で呼べ」

○ハチのアパートの前

ハチがいる。横にはボロい子供用自転車。あつけにとられる護。

ハチ「乗ってたかったんだろ」

護「……（自転車に手をかけるだけ）」

ハチ「まさか、乗れねえのか……？」

○広場

必死で自転車を漕ぐ護、後ろで支えていた手をそつと離すハチ。

護「僕、乗れてるのかあ？」

ハチ「笑って」ああ」

少し蛇行するがまっすぐに走る護。

護「気持ちいいー（子供らしい顔で笑う）」

× × ×

座って缶ジュースを飲むハチと護。

護が地面に自転車の絵を描く。

護「そうか、重心の配分か」

ハチ「つたく、ガキなんだか大人なんだか」

護「今度はドボンやろう」

ハチ「ドボン？」

護「ドボンって言われたら、何をしててもし

ゃがんで両手で地面触らないとダメなんだ」

ハチ「地面？」

護「大地には全ての命すなわちルートツがある、

それを掴むんだ！（立ち上がり空を見る）」

ハチ「ドボン！ はい、マモルの負っけー」

護「ま、まだ、始めてない」

ハチ「さ、そろそろ行くぞ（腰を上げる）」

護「ドボン！」

ハチはとっさにしゃがみ俊敏に両手を

地面につく。

ハチ「はい掴んだー」

護「あー、」

二人で大笑いする。

○ランニングコース 早朝（日替わり）

準備運動するハチと双葉。

双葉「博士ってのはあの子だったらしい。」

IQ250 超えだったよ」

ハチ「マジ？」

双葉「ホッカンバイオテロを防ぐ抗体をそいつが作ったらしい（走り始める）」

ハチ「抗体？ まさか（追って走り出す）」

× × ×

（フラッシュバック）

高熱のハチの口に、護が小さなペットボトルから液体を流し込む。

× × ×

双葉「ホッカン日本の警察にも手を回してたみたいで逃げ場がなかったみたい」

ハチ「それでか……」

双葉「？ SOS 信号はずっと出てるの、WHO に向けて。でもどうやって……？」

ハチ「あ……」

× × ×

（フラッシュバック）

携帯型ゲーム機でゲームをする護。

× × ×

ハチ「さすが……だな。（立ち止まる）」

双葉「（足踏み）最後の仕事よ、これをやり遂げたら私もあんたも足洗える、やっとな」

護の写真を渡し走り去る双葉。写真を
見るハチ、裏には名前『北原護25才』

○道 夜

ポケットに手をつっこみうつむいて歩くハチ、地面を見て、徐々に走り出す。

○ハチのアパート 夜

ハチがドアを開け入ると、異様な緊張感。見ると、銃口を真っ直ぐにハチに向けた護が立っている。

ハチ「え、（後ろに人の気配、銃に手をやる）」
護「僕の命は僕が守る！ ハチ、ドボン！」

引き金を引く護。しゃがむハチ。

後ろで倒れる、銃を手にしたヤブ医者。

ハチ「（振り向きざまに）ヤブ？！」

○防衛医科大受験会場 **か月後

カリカリと一心に答えを書くハチ。

○離島の古い診療所 10年後

待合室の島の老若男女。

○同・診療室

PC入力している若い医者その後ろ姿。

医者「顔を上げずに」次の方どうぞ」

男性の患者が入ってきて座る。

患者「先生、もうフラフラで、遠いしここ、」

医者「ふらふらするんですね、えーと、お名

前は……と、北原護、さん？」

患者（護（35））「ハチ、久しぶり。ラーメン

食いたい！」

驚いて顔を上げる医者、ハチ（29）。

机の上には赤ん坊を抱いた双葉（31）

とハチの笑顔の写真。写真の壁に小さ

く映る命名書『命名 流映』（ルート）。